

時間語の力

柴田佳美

一首のなかに、時間（時節を含む）をあらわす言葉「時間語」があると、作品の内容に奥行きが生まれると言われる。

今回は、優れた歌の中で、時間語がどのように表現されているのか見たい。

春がすみいよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へ
前川佐美雄 『大和』

「春がすみ」と「真昼間」が時間語である。作者は、春霞の立ちこめる真昼に目を凝らしている。

三枝昂之編 『前川佐美雄歌集』（書肆侃侃房）の冒頭は次の歌である。

ひぐるまの畑のいきれを吹く風に早もつ
かれてひと思ひをり
『春の日』

「ひぐるま」は向日葵のこと。間接的に夏をあらわす時間語と言える。向日葵畑を吹く風の蒸されるような熱気に早くも疲れ、人を思っている。作者の様子が、時間語の効果によって深みをとまなつて想像される。

ぞろぞろと鳥けだものをひきつれて秋晴
の街にあそび行きたし
『植物祭』

「秋晴」の言葉を手掛かりに、歌のイメージが広がってくる。この歌の明るさや賑やかさには、歌の外側にある人間の哀しさのようなものが溶かし込まれている。そのような気配をわたしは感じる。

真夜なかにしばしば我がるなくなり窓の外なる星とあそびき
『白鳳』

夏すでに終りとなりて咲き群るる花は
千年のむかしも紅き
『天平雲』
戦争の世にありて何もまだ知らぬわが子の声のとほる冬空
『日本し美し』

現実の中になにもや、遙かなるもの、無垢なものを描いた歌である。「真夜なか」「夏」「冬空」は、歌に空間的な奥行きを与えている。また、時代を経ても読む人に普遍的なものをお届けしてくれる。

郡司和斗 『遠い感（短歌研究社）も時間語の力を感じる一冊。』

お母さんが自分をお母さんと呼びはじめた夜を冷えるみずあめ

母親が母親の立場で話しはじめた時を、夜の雰囲気ごと表現する。冷える水飴からは、

寒々とした捉えどころのなさが浮かびあがってくる。

二階から降りてくるこの足音はまだ降る雪に気づいていない

駐車場のでかい水たまりに映る夏のはじめのマツモトキヨシ

作者は雪と重ね合わせて、雪に驚く人の顔を思っている。足音を聞きわける作者の耳は優しい。また、初夏の風景をマツモトキヨシといった身近な存在で軽やかに描くなど、表現は自在だ。

あなたといてあなたはしずか明け方の洗濯物は乾かすにある

輝きが視界の隅でかがやいてだんだんみえてくる夏の川

恋人と過ごした明け方であろうか。静かな美感と、乾かすにある洗濯物を組み合わせたことにより、場面の曖昧性が消えて印象鮮やかにになっている。夏の川の歌に湛えられた清潔な感慨が快い。

作者が生き生きとした感慨に出会った瞬間の、まわりの空気ごと読者は感じたい。時間語は簡潔な語でありながら、一首の中で力を持って読者に迫る。作者は、感慨に出会った瞬間が宿る、大いなる時間を見逃してはならない。